

中根 敬著

獨學日本地理書

下

特31

456

八九

賞本

館籍山會育教本日大			
室		第	
	一		三
	三		
二	一	五	一
冊	號	架	函

新編

東京
456
東洋文庫

東洋文庫

LIBRARY OF TOKYO

獨尊 日本地理書卷の下

畿内五國

山城

中根淑著す

明治十年圖書局發行

山城は豎に長く横に短く、櫛の形に彷彿たり、郡の數八あり、南は大和、巽は伊賀、坤は河内、攝津、東は近江、西より北は總持、丹波、是れ此の國の隣りなる、四方には山々多けれど、中には至つて平にて、其が中を京都といふ、今より一千餘年前、桓武天皇居を此所に居、玉ひてより、御一新の初めまで、永く續き、都なれば、土地も開け、人も多く、路筋は碁盤の目の

獨尊 日本地理書

如く建て家は櫛の齒の如く、近き頃は鉄道さへも出来上り
 たる多盛りなるいでや所々の物語りせんまづ皇居を本と
 して西には愛宕山嵐山あり此の邊より南に流る、水を大
 堰川といふ西北の方には北野御室金閣寺あり北の方には
 鞍馬山あり此の邊より南に流る、水を鴨川といひて、其の
 末大堰川に入る、良の方には北支山東の方には蒲團著て森
 たる姿の東山其が上に并べるは南禪寺知恩院祇園清水阿
 弥陀峯東福寺稻荷山其の南を伏見とす、西に東に見渡せば
 鳥羽の暇や小幡の里やがて小幡の山越にて醍醐小栗栖月
 の入る山科よりは一里半南の方に宇治といふ茶所あり中

に流る、宇治川は近江の湖の裾なるが伏見を過ぎて大堰
 川と落ち合ひ淀川となりて山崎八幡の間に流れ出づ、是は
 此の國の南なり織り物陶器及び茶をもて名物とす、

大和

秋津洲の大和國は郡の數十五ありて西は河内東は伊勢北
 は伊賀山城に界し南は角立ちて紀伊に入る、豎に延びて横
 に縮み南險く北平なり北の隅を奈良といひて古き昔の都
 なれば春日大佛三笠山名高き所いと多く昔忍ぶの人々は
 皆行きて尋ねるがゆゑ奈良の旅籠屋三輪の茶屋泊り休み
 の人絶ね一筋路の郡山西に方りて信貴龍田三室山の紅

葉は龍田の川の錦と咏みどは名歌といへども地理を知らぬの誇りあり是より南に大なる川二筋あり北にあるを大和川といひ南にあるを吉野川といふ此の川の南に吉野山あり櫻の花の盛りには雲かと疑ふばかりなる其の南に大峯あり又其の東に大臺山あり此の辺より紀伊に流れ入る水を北山川といふ産物には墨漆葛の粉木綿奈良晒一なりごあり

河内

河内は劍の先の如く細長き國にて大和を東に一紀伊を南に一和泉攝津を西に一尖りたる所を北にむけて攝津山城

の間こそ一挿む西は至つて平なれを東の境は山多く千早篠峰二上岳十三峠暗峠夜半には君がひそり越ゆらんと想ひやり一高安郡は此の山の麓より猶其の先に生駒山あり洞峠あり川は南の方に數々あれど北に流れて一筋となり大和より落ち來る大和川に流れ入る其の落ち合ひの西南に譽田道明寺あり川の北に八尾若江あり其の東と西に流る、恩知川玉串川は皆大和川の枝水なり國の巽に狭山池といふ大池ありて田地に水引く便りとす郡の數十ありて河内水綿を名物とす

和泉

戀ひくは尋ね来て見よ和泉國は郡の數四ありて、豎長く横狭く西にろげて東に張り横に見たる舟の如く國の界は北に攝津東に河内南に紀伊西一方は皆海なり西北の隅に港あり其の町を堺といひて家數多く糸綿の製造所あり夫より南石津川を渡りて海邊の方を高石濱といふ浦見ゆるなる葛の葉の忍ぶ信太の森近しまた其の南大津川を經て岸和田あり是より南の境まで津田近木瓦屋岡田里深日なんぞいふ細き川を許多ありて皆東より西に流るまた南界の山々を井関箱作孝子畑などいひ東界の山々を榎尾牛滝葛城などいふ綿麻双物をもて産物とす

攝津

攝津は南に和泉東に河内、且に山城北に丹波西に播磨を引と連ね南と西に海を受く北廣く南窄く長靴の形なり其が足首の所を大坂といひて秀吉の築かれたる大なる城あり城より西は横豎に掘り割り通り家込み人集り學校製造所など許多ありて此の邊に雙びなき繁華の所なり南の方に天王寺住吉大和川あり山城より流れ來る淀川は苦を假り寐の楫枕夜舟にて下るも半夜餘り西に合る、枝川を神崎川といひ中津川といふ其の本の水は城の北より西に回りにて安治川となり海に落つさて又國の北手の山間には有

馬の湯あり箕面滝あり滝の西を多田といふ此の邊の川々合ふて分れて神崎川に入り海に落つ其の落ち口を尾崎とす其の西に武庫川津戸川蘆屋川布引滝の未なる生田川常には水なき湊川あり此の川々の北手には武庫山六甲山麻耶山あり生田の西の神戸兵庫は難波江の葦の假り窠の一夜ならず年経て住める洋人多く横濱に續きたる繁昌の港ゆゑ京都の方まで鉄道を引き連ねたる是より西に聳ゆる山を鉄拐峰といひ海邊の山を一谷といふ是は昔平家の軍勢立て籠り範頼義経兩大將二手に分れて押寄せし所なり國中十二郡ありて酒及び御影石を出す

東山道十三國

近江

近江は大方玉子状にて國の界は北に越前東に美濃伊勢南に伊賀西に山城丹波若狹等なり内に大なる湖あり國の形に従ふて南より北に長一都に近き所を大津といひて知るも知らぬも逢坂の關路を跡に近江路や其の名も高き八景の石山粟津瀬田矢橋は湖の南にあり三井唐崎比良堅田は湖の西にあり堅田の上に比支山あり比良の下に高嶋川あり湖の北を海津といふ強い一と名にふれし木金の尊高足駄離れ馬の綱ふみ留めしは此の所の人ぞとよ其の南に

竹生嶋あり、東に回りて賤岳あり、姪川あり、左は伊吹石は長濱其の南を彦根とす、又南に犬上川、愛智川、横田川等あり、抑此の國の湖は、國中の川々を受け、南の方へ一筋に流れ出づ、是は宇治川の水上なり、郡の數十二ありて、縮緬、近江、晒、陶器を出す、

美濃

美濃は土地豊に、産物多く、郡の數二十一ありて、扇の地紙の形をなす、北の高山を大日岳といひ、東の高山を惠奈山といふ、隣りの國は、北に飛彈越前、東に信濃、南に三河、尾張、伊勢、さへ又西には壁一重にて、國を異にする所あり、美濃と近江の

寝物語りとは、此のこをいふなるが、飛彈より尖りて入りたる地は、扇の端の破れの如く、曲りもやらぬ、飛彈川は、信濃より來る木曾川と落ち合ふて、南の邊を西に過ぐ、國の真南を岐阜といふ、長良川良の方より流れ來て、其の後を回り、諸々の小川を合せて、河渡川となり、木曾川に入る、川の西に大垣あり、また其の西に関原あり、是より南の山中に、名高と瀧あり、養老といふ、産物には、美濃米、美濃紙、糸綿、縮緬、陶器あり、

飛彈

飛彈は郡の數三あり、北、弓形を越中にむけ、南山形を美濃に

入れ、東と西は真直に、信濃と越前とに界す、高原川東の方より西北に流れ、官川南の方より北に流れ、共に落ち合ふて越中に入る、益田川東の山より西南に流れ、美濃に落つ、東に乗鞍岳、錫杖岳あり、西より北に障子山、金剛峠、白木峰あり、また國の真中に高山といふ市あり、古飛彈の工みといひて、此の國より家作りの名人出で、四方の山より良き材木多く出づるゆゑなるべし、されば今に至りても、産物にさへ木具を出すなり、

信濃

信濃は大國にて、良より坤に長く、凸の字の形をなす、東は上

野、北は越後、西は越中、飛彈、美濃、南は三河、遠江、駿河、甲斐、武藏に界す、千隈川巽より出で、上田、松代を過ぎ、犀川、坤より出で、松本を過ぎ、次第に近寄りつ、落ち合ふ方は子か丑か、牛に引れて、善光寺参り、歩みも早き川水は、寅の方にや落つらん、さて上田の南に方りて、和田峠あり、峠の南に諏訪湖あり、天龍川是より出で、遠江に流れ入る、其の外木曾川は、美濃に入り、姫川は越後に入る、北には鷹打戸、隠黒姫なんどの山あり、西には麓風吹なんどより、峰々越えて御岳あり、東には四阿湯丸、浅間なんどあり、昔流行りそかいひ傳ふる、浅間山では、私はなけれども、胸に烟りは、絶江やせぬといへ

る唄にて、見ぬ人まで此の山の火山なること覺るべし國
中十郡ありて、生糸真綿絹麻蕎麥材木等を出す、

上野

上野は郡の数十四あり、國の形海鷲に似て、尾の先を巽にむ
け、下總の方に觸る、北の山より利根川流れ出で、西の方吾妻
川を合せ、前橋を過ぎて下總に入る、南の方武藏と界する神
流川は烏川碓氷川の落ち合ひを承けて、利根川に入る、國の
内に三の高山あり、東の山を赤城山といひ、西南のを妙義山
といひ、中のを榛名山といふ、また東下野北岩代越後の界に
も山々多く、西は信濃なる淺間の下に碓氷峠あり、昨日の雪

とはかなくも消れて此の世になき妻の胸に思ひの烟りた
つ倭武が吾が妻と宜ひしは是の邊のことならん草津伊香
保の温泉は諸病に効多く、生糸太物の産物は富岡をもて尤
盛りとす

下野

下野は西と南と上野に隣り、東は下總常陸に界し、北は磐城
岩代につし、郡九ありて、地面の形瓶の如し、南の端を佐野と
いふ、昔のことはいざ白雪今は瘦せ馬だにも見ぬ繁昌の所
なり、是より東北に方りて壬生宇都宮あり、西北に方りて地
藏岳庚申山あり、其の北に日光山あり、是所には東照宮の堂

宮ありて世に雙びなまき立て物なりされば諺にも日光を見ぬ内は結構とはいはれぬところいふなれ山中に名代の瀧多く其の湖より落つる水東に流れて常陸の南に入る之を鬼奴川といふまた北の方の川々落ち合ふて常陸の中ほどに入る之を那珂川といふ國の北に大なる原あり那須野といふ野中に殺生石といふ毒石あり生糸麻綿木具塗り物を名物とす

磐城

磐城の形は足を北に伸べて爪先を西にむけたる如し東は海南は常陸下野西は岩代北は羽前陸前を承く郡の数十四

ありて南界山多く其の脈國の中に向ふ西南の隅の白河は名高き名所にて歌詠む人の訪ふ所なり昔熊因法師は都にて白河の歌を詠み家に籠り顔のみ晒して此の地に來りありせしとかやされば川柳に鞋食ひまでは熊因氣がつかずと嘲りしをかりて白河の東に棚倉あり是より遙北に三春あり是は國の西境なりまた東南の隅に勿来関の跡あり其の北の海邊を岩城平とす鎌田川傍を流れて海に落つ是より北数十里の間木戸川富岡川高瀬川等あり又北の端に阿武隈川あり皆西より東に流る茶糸紙藍を産物とす

岩代

岩代は郡九ありて、西越後の方より之を見れば、狗の坐りたる形に似たり、胸を北にして羽前にむけ、脊を南東に一頭を良にして、上野下野磐城を負ふ、國の回り皆山にて、南には田代山、帝釋山あり、西には鬼面山、御神樂山あり、北には飯豊赤崩、吾妻あり、狗の頬に當る所を福島と一項の所を二本松と一脇の邊を若松とす、若松の北に盤梯山あり、其の間に猪苗代湖あり、其が東には五月雨にあやめも分かぬ、安積沼、苗代水の岸越にて、猪苗代にや満つららん、羽阿武隈川は巽より北に流れ、國の界に添ひつ離れつ、磐城に入る、鶴沼川は國の中を流れ、只見川は西を流れ、共に猪苗代の水と合ふて、越後

に落つ、是は阿賀川の水となり、蠟漆生糸、真綿をもて産物也、

陸前

陸前は北に陸中、西に羽前、南に岩代磐城あり、東の海には半島出で、南の方に海を抱く、其の先に金華山といふ島あり、西の界には笹谷峠、黒川岳あり、北の方には限り知られぬ、廣く耕地あり、南の方には名取川あり、川の北なる仙臺は此の邊無雙の都會なり、されば伊達家にて此の地を領せしとき、四角なる錢造りて、此の邊限り用ひたることあり、あのや仙臺通寶見るに付けても、嗜まらんやんせ、角トや世間が渡ら

れぬとは此のこまに託せて、人を論せる謠なるべし、また仙
臺より東の方の松島は日本三景の一にて、千々の小嶋星の
如く居並びたゞ青々たる松のみならず木の間に見ゆる数
多の白帆入り来る港は石巻北上川の落ち口なり、郡十四あ
りて金銅生糸馬を出す、

陸中

陸中は十郡ありて、北の方陸奥に二の角を入れ、西は羽後と
豎に界し、南より東の半まで陸前に隣り、其の外は海に向ふ
形半の首の如く角の地は左右とも山多く、額の邊は盛岡な
り、北上川頭の上より出で鼻筋に添ふて豎に流れ、陸前に入

る西の界には栗駒岳御駒岳あり、南の方には、其の名も高き
高館や昨日立ち今日さてあはれ衣川昔の跡を訪ふ人もな
し、総て此の國は山重り峰連り、北の邊の開けぬ地には文
字知る人少ければ画にて作りたる曆ありしほどなりしが
今は學校開けしゆゑ、子供さへ皆文字讀ひやうになりたる
が、あり難き金銀銅鉄馬をもて國産とす、

陸奥

陸奥は南羽後陸中に隣り、外三方皆海に出づ、真南よりは陸
中の角を承け、真北よりは入り海を受け、地面右左に分れて、
中わづかに續き、其の形比の字に似たり、以前は磐城岩代よ

り此の地まで総て陸奥といひ一を、近き頃五个國に分ち、
た、此の四郡のみを陸奥といふ東の地は、西に來滿山あり、
巽に末松山あり、其の北川々多し是より北に出で西に曲れ
る半島の良の角を尻矢崎といふ、また西の地は、入り海の止
りを青森と一北の外れを外濱とす、其の邊に三厩港龍飛崎
あり、西に回りて海邊近く十三瀉あり、岩木川南より流れ來
て之に入る、川上に弘前あり、其の西に高く聳ゆる山を岩城
山といふ、此の邊の古き流行り謠の中に、ありの儘なる野の
樂みは、ほんに王様もなるまいことよ成らうこそなれ、好い
妻もつて都見たさを手枕にといふ言葉あり、已が令を守る

人多きこと思ひやるべし、牛馬海嶺帆立て貝の産物あり、

羽前

羽前はもと羽後と共に出羽といひ一を、近年二に分ち、な
り、されば以前濕病むことを國名にて作りたる戯歌に、真が
むさゝ氣の昔にするが身のひぜん、是ではあはれ生さ甲斐
もなしと出羽といふ言葉遣ひたり、國中四郡ありて、南は
岩代磐城陸前に隣り、西越後と北羽後との界は、折り回りて、
其の間に今りたる地海に出づ、故に地面の形、万年草に似た
り、南の端を米澤と一其の遙北を山形とす、南の方より出づ
る水の彼方此方の川々を合せ、北に流れ西に回るは、音に聞

ゆる最上川上れば下るいな舟に底の心も浅からぬ流れの下を酒田川といふ川の南を莊内とす東に羽黒山湯殿山月山あり總トて此の國は三方山々多く内に高き峠多し金銀紅花生糸反物を産物とす

羽後

羽後は東を陸中北を陸奥西を海に向け南は細き地を抽で、羽前に入る形短き柄の庖丁の如し西南に鳥海山あり其の西北に象潟及び有耶無耶関あり此の邊の名所なり其の北小川數々經て御物川あり是は東と南の川々同りて落ち来る水なり川の北の海辺を秋田とす此の邊の秋冬を秋田

秋冬といひて大さ傘の如し琴や豊後の文句にも秋冬といふも草の名といへど始めて見る人々は其を草と思ふものかは秋田の西北に大なる湖あり八郎潟といふ其の水南に出で海に通ふ西の岸の小鹿島は海に張り出でたる地にて庖丁の缺片とも見立つべしまた北に陸中より流れ来る能代川あり其の外東の深山に田澤湖あり郡八ありて金銀生糸材木を出す

北陸道七國

若狹

若狹は其の産物山に水晶砥石あり陸に蠟漆あり海に鮫和

布あり、郡の數三ありて、北に海、西に丹後、南に丹波、東に近江、越前を受く、其の形敗れたる蓮の葉の如し、蓮の葉に溜り、水は釋迦が涙かあり、難や、國を沾し、人を沾す、内海の、南の岸を小濱といひて、其の海東西に廣く、其の口却つて狹し、是より東界の間に、また入り海ありて、中に常神岬出づ、岬の南に三方湖あり、熊河川國の東より出で、名田莊川西南より出で、小濱を夾みて海に落つ、其の邊に多田岳、後瀬山、青井山あり、

越前

越前は東に加賀、南に飛騨、美濃、近江、西に若狹を受け、北は坤より艮にうけて、海に向ふ、地面の形加賀を合せて、魚に似たり

り、洞より下を此の國とす、若狹につきたる尾の所に敦賀港あり、上に氣比社あり、宮居久き神垣や、松の木、茅山、猶ゆく、先に見ゆたるは、遠くに杣山、近くに板取、皆國の南の山々なり、白木女川、此の邊より出で、川瀬の水の落ち合ひつゝ、未は三國の港なる海の中に流れ入る、又國の東南は白山の脈にて、山々高く、別山、大日山あり、麓に白山湯出づ、其の西の方に流る、九頭龍川は、北を指して、白木女川に入る、其の落ち合ひの間を福井とす、奉書紙、奉書袖、雲丹、茶生糸を出し、郡の數八あり、

加賀

加賀は郡四ありて、西より南、越前に隣り、南より東、飛禪越中
能登に隣り、北は斜に海に向ふ、形魚の胴より上の如く、南の
方の白山は、北陸道にて第一の高山なり、西界の海辺近き所
を大聖寺といふ、其の北の方の葦の篠原波越にて、東の岸を
安宅といふ、其の南に小松あり、是より東、梯川手取川才川を
過ぎて、東界に近き所を金澤とす、是は此の邊第一の大都會
にて、學校など數多あり、彼の加賀の千代といひは、此の地
の生れにて、才ある女子なりは、善う人の知る所なり、古き
に此の如き人出でたり、まいて今は男も女も螢の光りに文
を讀む、こきにあれば、秋の野や花になる草ならぬ草とも

共に秀で、實らんこところ、願はしけれ、糸紙羽二重九谷焼
さをもて産物とす、

能登

能登は四郡ありて、南より北東に延び出でたる半島なり、其
の形手頸に似て、甲を北に、掌を南にす、掌の前に能登島と
いふ半島ありて、形甚丸く玉といはんか、鞠といはんか、鞠に
付いて思ひ起せる鞠唄のかんく、加賀と越中は、此の國の
南界なり、越中に偏りて、能登島に向ふ港を七尾といふ、此の
邊にての良き港なり、是より東北指の先に當る所は、内海の
入り口にて、珠洲岬といふ、上に山伏山あり、是より續きて、國

の中まで山々多し、北に回りて河井港あり、西に回りて福浦あり、其の南に金丸潟あり、加賀の界に近し塩海鼠塗り物等の産物あり。

越中

越中は越後信濃を東にし、加賀能登を西にし、南の飛彈も北の海とを山形に受く、其の形分銅に似たり、海の止りは國の半にて、其の上を富山とす、飛彈より流れ来る神通川は、其の傍より海に入る、是より西の方には射水川、小矢部川等あり、東の方には常願寺川、早月川、片貝川、布施川、黒部川等あり、皆南より北に流る、また西界の山には栗殻峠、砥並山あり、坤に

は水無峠あり、異には立山あり、立山の中に地獄谷といふあり、其の深き計られずといふ、抑北國には弥陀の本願によつて成佛すると定めたる一向宗の人々多し、極樂あるものは地獄あるも理なり、地獄を出づれば西なり、南の方に淨土山あり、北の方に佛岳あり、郡四にて、紙茶糸水綿を出す。

越後

越後は良より坤に長く、其の中南に張り出でたる所ありて、形蝙蝠に似たり、國の界、西は越中、南は信濃、上野、巽は岩代、東北は羽前、北は蜷りて海に臨む、越路がたれ、國名物は様ぐあれど、田舎訛りの片言交りせば、たゞ徒の悪れ口にて世に

重寶なる金銀銅鉄石炭桑茶布や縮みの善き物多し郡の敷
七ありて西南には焼山妙香山南には八海山中岳東には守
門岳西北には旭山皆高き山々なり越中に近き街道に波打
ち上ぐる險き所あり親知らずといふ是より川々許多經て
関川に至り其の上を高田とす音に聞はる大雪の所なり其
の西北に米山あり山の北の海邊を栢崎とす國の真中に長
岡あり信濃川南の方より流れ来て其の西を過ぎ次第く
に水増して北の海に入る其の口を新潟港とす土地至つて
繁昌なり川の南に鎧潟あり北に阿賀川ありまた北に福嶋
潟あり新發田あり

佐渡

來いといふたそて行かりよか佐渡へ佐渡は四十九里波の
上とは越後邊の唄ならん夫佐渡は越後と近き所二三十里
遠き所四五十里ほども隔りて其の形蝶の如き嶋國なり東
の羽の南の方に小木港あり其の後に金山あり脊筋の所は
右左より小川落ち合ふて南に流れ頭の所より海に入る之
を國府川といふ尻の邊に越湖ありて海と通ず其の上に夷
町湊町あり西の羽には南に相川あり中に金北山あり北に
檀特山あり總べて此の國は所々に金山あるがゆゑに日本
にて金銀を堀り取ることば此の地をもて尤多しとす郡の

數三あり、

山陰道八國

丹波

丹波は六郡ありて、形龜甲に似たり、東は山城、近江若狹に入り、西は播磨、但馬に入り、南攝津と北丹波とは皆一文字に界す、國の四方山々多く、北に御岳鬼城あり、東に知井山あり、其の西南を芥生とす、一字千金二千金、三千世界の寶とて、教ふる道は寺子家ならで、學校の開けし所は、巽に龜岡、南に篠山、西北に福知山、また東の界より出づる川二筋あり、一は西を指して福知山に至り、北の方丹後に落つ、是は大川の水とな

り、一は西南に流れて東に回り、龜岡を過ぎて山城に落つ、是は大堰川の水となり、糸茶、煙草、砥石、材木を出す、

丹後

丹後は五郡ありて、國の界山高し、南は但馬、丹波に交り、東は若狹に隣り、北は海と出入り多く、其の地面若狹と裏腹の形をなす、東北に入り、海ありて、其の止りを舞鶴とす、西に建部山あり、また西に大川あり、其の口を由良港とす、是より北の角を回りて、西南に入る内海あり、與謝海といふ、其の南の濱を宮津とす、宮津の坤に大江山あり、北の濱より南の方へ長く出でたる洲は、松の木多く生へ、并び、遠くより眺むれば、實

に橋の形なり、是は日本三景の一にて、まだ踏みも見ぬ人さへも聞き及びぬる天橋立なり、此の海の後の地は、角立ちて外海に出づ、其の先を經岬といふ、西の方に竹野川、佐野川等あり、縮緬、緬蠟、漆の産物あり、

但馬

但馬は南に播磨、丹波、東に丹後、西に因幡、北に海を受く、形西洋の茶碗に似て、底を南にむけ、取り手を東にむく、豊岡川南より北に流れ、丹後に近き所より海に入る、川の口を津井山といふ、其の上に温泉あり、湯島といふ、後に来日岳あり、また川の中頃の東岸を出石と、西岸を豊岡とす、源の方に朝来

山あり、其の西に方りて生野、銀山あり、多く金銀を出す、此の邊の人々は七八から金山へ行く、行きてやうすを知り置かば、遂には善き礦山、學者ともなりぬ、又、扱また来日岳の西に市場川あり、其の落ち口の岬を猫崎といふ、其の西に丹生港あり、大谷川之に入る、次に餘部岬あり、其の次に因幡に近き所に諸寄港あり、郡八にて、糸紙、牛の産物あり、

因幡

因幡は郡の數八あり、形大抵四角にて、巽の方少出で、乾の方少欠く、其の外北は海に臨み、西は伯耆に隣り、南は美作、播磨に界し、東は但馬と立ち別れ、因幡山の峰續き、豹山、菅山あり、

加露川南の界より出で、東の方因幡川を合せて、北に流れ海に落つ、其の川口を鳥取とす、是より東海邊に近き所に二の湖あり、湖山池といふ中に小島あり、青島といふ、また其の西に奥澤見池、日光池あり、其の南に方りて鷲峰山あり、此の國にて尤高き山なり、糸紙、木綿材木をもて産物とす、

伯耆

伯耆は東に因幡、南に美作備中を受け、西南角立ちて、備後出雲の間に入る、北は山形して海に張り出で、西に偏りたる方岬を出す、國の形菌に似たり、まづ此の國の地をもつはにていは、高きものは、南の方の大山、長きものは、西北の弓濱岬、

揃ふたものは、東に橋津川、西に日野川、多きものは、其の間の小川なり、さて橋津川の東に東郷池あり、其の水川と共に海に落つ、弓濱岬の本は、東の隅を日野川の口とす、西の隅を米子とす、岬の先は、出雲の三保関と入り違ふて、内海を抱く、此の邊より遙に異を望めば、大山高く雲間に秀づ、是は山陰道にて第一の高山なり、郡六ありて、鉄麻、紅花、木綿を出す、

出雲

八雲たつ出雲、國は、東に伯耆、南に備後、西に石見を受く、北は海に向ひて、乾の方、曲尺形に欠け、良の方、伯耆と内海を抱く、其の西に松江湖あり、中の鱸味ひ好きがゆゑ、昔唐の人が、松

江の鱸とかいひたることありとて、其の文字を取りて、かく
名けしとかや、湖の口川となりて内海に通ふ、其の北に松江
の町あり、南の方に八重垣山あり、是より東に富田川井尻川
あり、また巽の隅の山を鳥上山といふ、其の下を簸川の水
上とす、神代の昔、素盞鳴尊といひ、ひり大臣の蛇を退治せられし
は、此の邊とぞいひ傳ふなる、其の川水西北に流れ、分れて湖
の南と西とに落つ、其が西の方の古志川は南より北に流れ
て、曲尺形の海に入る、其の北を杵築とす、大社あり、また北に
宇龍崎あり、西北の端れなり、國十郡ありて、紙蠟、鉄、陶器を出
す、

石見

石見は郡六ありて、東を出雲、西を長門、坤を周防にむけ、南の
方安藝を弓形に受けて、其の形に北の海に出づ、堅短く横長
く、鬪雞の首に似て、喙を巽の方、備後に觸る、國の中山、阪多し、
東の界は上に三瓶山あり、下に波根湖あり、其の西小三川々
を越えて、山陰道第一の郷川あり、是は備後より来りて、國の
中を斜に流れ、海に入る、其の西に方りて、濱田あり、前の入り
海を外浦といふ、是より西の陸地、南の方に少下る、高角川、西
南なる津和野の邊より来り、其の真中より海に入る、西の岸
の高角山に、人丸の社あり、北を望めは、ほのぐと、明石の浦

の朝霧あさぎりならで、石見いはい瀨せの波なみ高く、島かくれゆく舟ふねを、一ひとつ思ふ、紙蠟銀なまぐ鉛なまぐをもて國産とす。

隠岐

隠岐は出雲の真北まきたなる海の中なかにありて、島の數かず四あり、南の三みつは皆大おほきからず、互たがひに近ちかよれり、之これを島前しままへといふ、北きたの一ひとは大きく、一ひとて、蜘蛛くまの物を捉とらる形かたちなり、之これを島後しまごといふ、蜘蛛くまの手て異ちがの方かたに向むかひ、夫つまより内海ふたまた二岐ふたまたに入る、東北たひまたに大満寺だいまつ峰みねあり、西にしに回まわりて、福浦港ふくらうあり、島前は西の島長ながく、一ひとて、南みなみに焼火山やきかみあり、東あづまのは丸まるく、一ひとて、東あづまに知々ちち井港いこうあり、南みなみのは小こく、一ひとて、南みなみに知夫里港ちぶりあり、昔むかし小野篁おののえ故ゆかりありて、流罪るざいとなり、八十島やそかけて

漕こぎ出いでつ、此所こゝに來り住すみ、一ひとより後文ごぶん覺上かくじやう人罪にんざいありて、流ながされ來り、また其そのの後のち後鳥羽院ごうはういん後醍醐帝ごたいごてい引ひき續つきて流ながされ、玉たまひ、一ひとゆゑ、彼方あなた此方こゝに、其そのの故跡こゝろ殘のこれり、こゝ、郡ぐん四ありて、鰯海いわしうみ鼠ねずみ鮑あわの産物うぶものあり、

山陽道八國

播磨

播磨は十六郡ありて、東は攝津、北は丹波、但馬、因幡、西は美作、備前、に界か、南は海を受く、形風かたかぜ折ひ鳥帽子とりぼうしの如ごとく、巽すみの隅すみを明あ石いしといふ、攝津の須磨浦すまのうらかけて、白波しろなみのよする渚なみさ打ち續つき、景色けしき好よき所ところなり、其そのの西にしの方かたの加古川かこがわは北きたの山やまより南みなみの海うみに

流れ入る、其の川下は高砂や此の浦舟に帆を揚げて月もろ
ともに出で汐の海見渡せば家島淡加島あり、また加古川の
邊には石寶殿尾上松なんどの名所多し其の西に市川あり
川の上を姫路とす北に方りて書寫山あり是は大抵國の半
なり正条川北の界より豎に流れ、姫路の西の方より海に落
つ、其の口を室津と川上を龍野とすまた西に有年川あり
川口の西を赤穂といふ塩の名物あり、其の北に舟坂峠大日
山あり皆西の界なり明石縮み消皮炭をもて産物とす

美作

美作は葉山茂山打ち圍り南は備前東は播磨北は因幡伯耆

西は備中に界す、地面西東に延びて足跡の形せり、國の真中
に津山の町あり、其の西南に沙良山あり、國の西に勝山の町
あり、其の西南に赤見山あり、西川乾の方より、勝山の西を通
りて備前に入る、其の次ぎの東川北の界より津山の西南を
回りて、また備前に入る、抑美作は山陽道の山國にて、是より
西南の方は總べて海ある國のみなり、今日本中の山國を知
る歌を二首作りて示さん、海なきは山城大和河内伊賀丹波、
國も美作國近江美濃飛彈甲斐信濃上野と下野岩代、これは
海なし、是は至つて拙けれども稚き人の諳覺のためには
りす、郡十二ありて、鉄紙烟草雲才を出す、

備前

備前は郡八ありて、南を海にむけ、東を播磨につけ、北を美作、西を備中に當て、其の間に窄き地を入り、形蓮の實の袋の如し、西南の方を岡山とす、西大川美作より来り、其の東を回りて、入り海に落つ、向ひの地は、備中に續きたる、児島といふ半島にて、西の方には下津井港あり、東の方には岬ありて、牛窓に向ふ東大川美作より、國の中を豎に流れて、其の内の海に入る、川の東は、北に天神山あり、南に熊山あり、牛窓より東の界まで、海邊長く、前に小島々あり、さて、近頃此の國より、四國路まで海を通して、傳信の線截り、人々大に便利を得

千尋の文を鴈金に、言傳てたのむ燕の便りなぞ、いひ一は、はや古めか、しき唄ところなりぬれ、茶酒砂糖陶器を出す、

備中

備中は北の方尖りて、美作伯耆の間に分り、東は備前、西は備後に隣り、南は海に向ひて、備前の児島と著く、故に國の形鳥賊の如くにて、児島をもて足に擬ふ、巽の方の吉備中山には、吉備大臣の社あり、抑吉備大臣は中昔の人なるが、唐國に留學し、國に歸りて、民をも治め、學問をも開き、は、皆人の知る所なり、今の外國に留學する人々も、道こそ異れ、かくあらまほしきところ、山の西に大井川あり、また西に甲部川あ

り、此の川は、西北の川々落ち合ひ、國の真中の高梁を過ぎて南に流れ、西より来る矢掛川を合せ、また二筋となりて海に入る、此の邊島々多く、沖の方を水島灘といふ、北の界は花見山、劍山等續きて、土地甚險、郡十一ありて、糸茶鉄銅を出す、

備後

備後の界は、南は海、東は備中、西は安藝、北は伯耆、出雲、石見なり、國の形南狭く北廣く、鷲の首の如くにて、嘴を乾に向く、巽の隅を福山とす、其の西南の岬を回りにて、鞆港あり、また西に阿太岬あり、是より地方北に退きて海を受く、其の上に尾道あり、是は繁華なる所なり、其の次ぎを三原とす、安藝の界に

近し、是より北の方の川々聚りて、東に流れ、南に折る、は葦田川、葦田の水も今津經て出て来た濱の夕涼み川、風寒く福山の西の方より海に落つとて、又安藝より入り来る吉田川は、國の北手の川々を承け、界に添ひつ、海に落つ、是より郷川の水上なる郡十四ありて、木綿煙草疊み表を出す、

安藝

安藝は八郡ありて、山多し、西は周防と堅に界し、北より東は石見備後と大方方形に界し、南は海にむきて、東の地出で西の地入る、形髑髏に似たり、北の方に吉田川あり、東に流れて備後に入る、東の地の坤に倉橋島あり、其の間を音戸峽とす、

峽の西に江田島あり、淺き海を隔て、北の方を廣島とす。可部川西北より東に流れ、南に折れて廣島の海に入る。是より西に島あり、宮島といふ。地方に向きたる方、美事社あり。是は日本三景の一なり。安藝の宮島、回れば七里、よ浦は七浦、七夷といふ。唄にて、島の形勢分るべし。山蚕木綿、牡蠣の産物あり。

周防

周防は郡六ありて、東は海と安藝とに界し、北より西は石見、長門と界し、南は陸と水と出入りつ、海に向ふ形、敗れたる鮑貝の如し。西の山手に山口あり、其の東に佐波川ありて、南の海へ流れ入る。其の巽の角を中関とす。是より海邊北に下

りて半に徳山あり、此の間塩濱多し。是より巽の方、半島の所を室津といふ。其の東北に小き灣二三ありて、東の界に至る。其の上を岩國とす。岩國川西北より流れ来て、其の前を通り海に入る。是の所に名高き橋あり、錦帯橋といふ。其の作り方、橋敷きの臺兩岸に二川中に四二と四と合せて六杭ある橋。二杭なき橋三二と三と合せて五五の橋、六の橋敷きに掛りて、形箕盤に似たり。故にまた箕盤橋ともいふ。また岩國の南に大嶋あり、其の北に長嶋あり、之を上関といふ。紙縮みをもて産物とす。

長門

長門は海峯の形して良より坤に長く横り東の方角立ちて、周防石見に界し其の外は皆海に出づ郡六ありて、紙塩魚類の産物多しさて周防の界より西は小川多く一二三四夜露雪の日下関路もやがて盡くれば海に向ひに豊前國あり此の間半里に過ぎぬ瀬戸なれば汐路早く中々に波の底に都ありとは思はれず海に添ふて西より北に回れば陸と水と出入り多し其が中に向津具といふ岬ありて入り海を抱き、粟山川南より來りて其の中に入る是より東の海辺また出入り繁く海の方には小島多し河上川東の隅より西北に流れ海に落つ其の落ち口を萩とす是は大抵向津具と石見界

その半なり、

南海道六國

紀伊

紀伊はへの字形して、南の海に出で、後は大和の角を抱へ、西北は河内和泉東北は伊勢に隣り西北に吉野川の未なる紀川あり川上には高野山あり川下には和歌山あり夫より東に紀三井寺其の前を和歌浦とす是より東南の山川越えて海の上に田邊あり猶また東南に行き詰むれば南の角を岬といひ前の島を大島といふ是より東北に回りて新宮あり其の後を那智山とす山中に那智瀧あり其の北の方を本

宮とす是は紀伊國、音無川の水上なり、此の水北山川と落ち合ふて、新宮の北に落つ、此の邊より伊勢の界までを總べて熊野といふ、山險きゆゑ、人の交り至つて狭し、九木浦なんどは、小き港なれども、所人は、九木の浦にも名所かどざる、千里丸香ふ千里香やと唄謠へば、親船の碇までも浮くなんど、自分だけに樂むさま、大古の人に彷彿たり、郡七ありて、密掛塗り物材木鯨の産物あり、

淡路

淡路は靴の形したる島國にて、踵の方の由良港を、紀伊にむけ、凡先の方の岩屋を、播磨にむけ、口の方の福良を、阿波にむ

けて、皆海峡をなす國の真中に先山あり、此の邊より出で、西の海に入る水を三原川といひ、東の海に入る水を須本川といふ、其の川口を須本とす、由良の北にあり、また岩屋の西の岬を松帆崎といふ、是より折れて西に回れば、松帆の浦の夕なぎや藻汐滴り國となり、そいひ傳ふる、天浮橋の昔話、一は此の國のことなるが、郡二ありて、海甕陶器を出す、

阿波

四國の地にて、巽にある國はいづくそ尋ねれば、阿波國にこそあるなれ、郡十ありて、地面大方菱の形なり、東と南は海を受け、西は劍山夏峰もて、土佐伊豫に界す、北の隣りは、君を阿

波へ置き、讚岐へ住むで、私や鶴の栗思ひといへる唄にて、
分るべし土佐より来る吉野川は北の方を東に流れ、幾岐に
も分れて海に落つ、其の上を徳島といふ、西南に焼山寺山あ
り、東北に大毛山島田山といふ島あり、其の海を鳴戸とす、徳
島より南の海邊は出入り多く、巽の角を椿崎といふ、是より
南に回りて由岐港あり、日和佐川あり、是は西界より来る水
なり、其の西に海部川あり、また次ぎに鞆港あり、西の界に近
し、藍塩銅を出す、

讚岐

讚岐は南一文字に阿波に界し、西わづかに伊豫につき、北

形に海に出づ、形蓮の葉の半分の如し、西に偏りて箱岬あり、
其の東に多度津港あり、次ぎを丸龜とす、南に方りて象頭山
あり、巽に方りて綾松山あり、是の邊より瀬を早み岩にせか
れて流る、水を府中川といふ、川口の東に乃生崎あり、其の
東を高松とす、是より小川二三経て、山あり、八栗山といふ、岬
あり、八島といふ、此の地佐藤次信の墓あり、次信は源氏の勇
士なり、一が平家の方に名高き強弓能登守教経がよつ引と
兵と放つ矢に命を落せし人なり、八島の前に小豆島あり、
東に志度浦あり、また津田川横瀬川あり、総じて此の國は中
國と海を隔て、島々多し、其の内西の方の塩飽七島は尤名

高き島なり、郡十一ありて、塩砂糖木綿を出す、

伊豫

伊豫は東南長く及びりて、土佐を受け、西と北は折れつ曲りつ海に向ひ、良の方阿波讃岐に界す、地面細長くして、郡十四あり、南界の半に唐岩峰あり、肱川其の西より北の海に流れ落つ、川の西を大洲とす、其の北より長き岬延び出で、西の方豊後を指す、肱川の東に菅生山あり、また東に重信川あり、川の上を松山とす、東に道後湯あり、其の北に方りて岬あり、宮崎といふ、其の本を今治とす、是より讃岐の箱岬までの海、三日月形をなす、其の半に西条小松あり、此の邊は細き川々多く

して、伊豫簾の如く、南の方は高き山々重りて、伊豫漆めの如く、さて又大洲の西の灣を始めとして、南脱れまで三四の灣と岬とあり、二目の灣の中を宇和島とす、紙塩砂糖を出す、

土佐

土佐は鎌の首形して、背を伊豫につけ、後を阿波につけ、其の外は皆海に出づ、郡七あり、東の角を室津崎といひ、西南の角を足摺崎といふ、吉野川北の方より東に流れて阿波に入る、其の南の川々は、是と行き違ふて、西に流れ海に入る、二淀川國の半を截ち切りて海に入る、東に小き入り海あり、其の上を高知とす、二淀川より西の方海には須崎佐賀下田の港あり

り陸には山川多く、西南に至りて四万十川あり、さて此の國北の方は山多く、材木石炭銅なんぞを出し、南の方は海廣く、真珠珊瑚樹なんぞを出す、また此の海にて、鰹々かつおとよぶ聲は、勇み層なる獵師にて、魚多く取る、そきは、皆鰹節に製りて賣り出す、之を土佐節といひて、此の國第一の産物なり、

西海道九國

筑前

筑前は驢馬の首に似て、口先を巽の方豊後に當て、面を南の方筑後につけ、耳を西の方肥前にむけ、頸と鬣を東と北に出す、面の邊を秋月といふ、此の邊の水聚りて、蘆屋川となり、咽

の方へ流れて、岡港に入る、其の北に鐘崎あり、是より地方北に回りて、二三の入り海あり、二目の海は、東南に箱崎博多福岡あり、其の南を大宰府とす、つらき筑築に九つ年月御いたほしや、菅丞相讒者のわざに罪せられ、此の地に貶けられ玉ひしは、世の人の知る所なり、さて又博多沖から船こぎ出せば、西南には志摩の半島あり、西北には鳥も通はぬ玄海灘あり、共に肥前に近き所なり、郡十五にて、博多織り石炭を出す、

筑後

筑後は南を肥後、東を豊後、北を筑前、西を肥前と海とにむく、國の形三股に似たり、筑後川豊後より來り、北の界を傳ふて、

西の界より海に落つ、是は九州第一の川なり、川口より上方りて久留米あり、其の東に高良山あり、また國の東界に高井岳あり、其の南に文字山あり、矢部川其の辺より出で、西に流れて海に入る、川の下を柳川とす、此の邊海川の魚獵多し、されば仮り多めの俗歌にも、鰯と鯛の魚と鯛の魚と鰯と肥前山をば今朝越はたなんと、いへるあり、是にても魚の多きこと想ひやるべし、郡十ありて、蠟菜種石炭を出す、

豊前

豊前は郡八あり、南の方な夕へ形して豊後に入り、西の方も同形して筑前に入り、北は岬ありて、豊後の端と東の海を抱

く形開きかけの花に似たり、北の岬は長門に向ひ、其の間には赤間なる硯の海の青疊々陸の隅には門司関書と書きための春は来にけり、柳浦其の西を小倉とす、南に方りて山々多く中に尤名高きは雲間に聳ゆる彦山なり、小波瀬川此の邊より北東に流れ海に入る、また彦山の南より同向きに流る、水を高瀬川といふ、川を中津とす、南の方に鹿嵐山あり、東の方に厩館川あり、川の上を守佐といふ、八幡の社あり、蠟塩石炭小倉織りを國産とす、

豊後

豊後は、猫の鞠を押ふる形に譬ふ頭を西筑前筑後に當て、前

を北豊前に後を西と南の肥後日向にむけ、手足の方を東の海に出す、國中山多し、猫の肩に方つて由布岳あり、其の北の方の火山を鶴見岳といふ、是より西の川々一になり、西に流れて筑後川となる、鞠と胸との間は、大なる入り海にて、北の岸に杵筑日出あり、近頃頃ば上方の入此の邊の茶を多く買ひ入れ、宇治の茶といひなして賣るとかや、それどかく好ま品出づることならば、なごか獨立ちて其の名を立てざる、口惜きことにころまた入り海の南の岸を府内といふ、其の南に由布川あり、また南に白嵩川あり、是は西界より来る水なり、川口の東に佐賀関の岬突き出で、伊豫に向ふ、岬の本を曰

杵と、また南を佐伯とす、此の邊小岬多し、郡八ありて、紙蠟硫黄を出す、

肥前

肥前は孔雀の形して、尾を南の海に向け、足を西北の海に伸し、首を東の方筑前筑後に入る、項の所を佐賀といひ、是と尾の間の海を有明沖といふ、尾三にさけて、皆半島をなす、間に海を抱く、東の半島は中に温泉岳聳に、肥後にむきたる方島原あり、中のと北のとの間、海の止りを長崎とす、昔より外國船の来りて、交易する所なれば、土地至つて繁昌なり、また尾と足との間は、口狭く、中廣き海にて、東の岸を大村といふ、其

の北東に武雄山あり左の足下の島を平戸とす其の西の五島の島を五島とす兩足の間また海廣く南の岸を伊万里とす其の外胸の所に唐津あり喉の邊に鬘振山あり北を望めば白波を分けて行くなる真帆片帆此所に歸りを松浦瀧望夫石の古事は此の所の話一か一郡十一ありて陶器烟州石炭鯨油を國産とす

肥後

肥後は南に薩摩南より東に日向豊後北に筑後西に海を受け東に向ひて凹の字の形をなす北の肩大く南の肩小く良の方に火山あり阿蘇山といふ北の方に車帰山あり白川其

の間を通り西の海に入る川の海に近き所を熊本とす南に川尻川あり其の南を宇土といふ是より西の方に岬出で南に小き海を抱ふ其の先を八代とす球麻川南界なる人吉の東より西北に流れ八代の南に落つ川口より南に進み沖を遙に見渡せば雲か山か知らぬ火の筑紫に名高き天草島二三と地方近く打ち並び宇土の岬と峽をなす郡十五ありて蠟紙陶器烟草の産物あり

日向

日向は西に向ひて凹の字の形をなす南と東に海を受け北は豊後西は肥後大隅に隣り南の肩を立て薩摩に觸る國

界山々多く、人の心質素なり、其の一端を攀げていはゞ女子の模様物にて、裾の二寸も出でたるが、皆木綿地を用ふるほどなり、さて國の乾に祖母岳あり、五瀬川其の南に流れ海に入る、川の口を延岡とす、是より南門川耳川高瀬川を経て高鍋あり、其の南を佐玉原とす、また南を宮崎とす、西に法花岳あり、南に大淀川あり、其の水は西の方繩瀬川と猿瀬川の落ち合ひなり、是より西に火山あり、霧島山といふ、また大淀川の南に弘木田川あり、其の上を飲肥といふ、是より南の海まで路程猶遠し、其が巽の角を都井崎といふ、郡五ありて、茶紙蠟漆材木を出す、

大隅

大隅は蛤蜊の形して、其の躰を日向薩摩の間に入れ、頭の方を南の海に出す、また西の方は腹の所入り海をなして、其の内に櫻島を抱き、是より南は総べて海を隔て、薩摩と向ひ合ふ、櫻島の中に御岳あり、常に烟りを吐き出す、國の中項に廣瀬川あり、南に流れて入り海に落つ、其の外巽に向ふ角を火崎といひ、坤に向ふ角を佐多岬といふ、其の南に方りて、大なる島二あり、東にあるを種島とす、西にあるを屋久島とす、さて、此の國は日本の西南の隅なれば、大隅といふも理なれど、今の世は千里も一里通ひ来る、淺草ならで深き海を苦

もなく走る蒸氣船あれば、さまで速くとも思はれぬなり、郡
八ありて、金烟草砂糖を出す。

薩摩

薩摩は十三郡ありて、北は日向肥後に界し、西と南は外海に
向ひ、東は大隅と半内海を隔て、半地面を合す、國の形堅長く
横短く、鬚なき海老を北に向けたるが如く、北の方に紫尾山
あり、仙代川大隅より来り、山の南を通り、西に落つ、川口の西
に方りて、三の甑島あり、また川口の南の羽島崎と西南の野
間岳との間は、廣き灣をなす、野間岳よりやうやく南に回り
て坊岬あり、其の東の港を枕崎といふ、次ぎに海門岳あり、是

より回りて、東の方は入り海の口なり、海の止りを鹿兒島と
す、さても此の國の人々は、たゞ強きを好む風俗なれども、夫
に引きかへ、琵琶を好むもの多くありて、剛き男がやさしき
聲して、峰の嵐か松風か、尋ぬる人の琴の音かなんぞ、唄ひ
出づるが不思議なる、陶器煙草をもて名物とす。

二島

壹岐

壹岐は小島國にて、肥前平戸の北十二三里の所にあり、四
海波静にして、國も沼る代のため、一軍を見るは夫ならで、鯨
捕る船のかけひきなり、西北の方に勝本あり、西の方に湯本

あり、共に鯨の獵ある所なり、また南の方の郷浦の一の町にて常に舟の入る所なり、郡二ありて、鯨海草干鮑を出す

對馬

對馬は壹岐の西北四十餘里にある島國なり、形百足の如くにて、南北に長し、郡二ありて、山々多く、其の間僅に畑地あり、北の方の高き山を御岳とす、是より山續きにて、南の方に至り、山の絶ゆる所に内海あり、岬多く入り江多し、其の止りに川ありて、東の海に通ふ、南に嚴原あり、東に向ふ、其の後に有明山あり、麓には小き馬多く重頂より遙に朝鮮を見るといふ、昔神功皇后武内臣が韓の大將服らせしかば、後には其

の國のもの支那の人と共に此の地に寇したり、されど今は何も親き國となりしゆゑ、かゝる騷ることなきが愛でたき

北海道十一國

渡島

渡島は北の方膽振後志に界し、其の外は海に向ひて、大なる弓形を受く、故に地面の角三方に出づ、郡七ありて、山多し、南の方に小き半島あり、其の内を箱館港とす、北海道にて双びなき繁昌の所なり、國の西南の角に白神崎あり、其の西を松前とす、是また人家多き所なり、蝦夷松前のれ方でも心に二はないといへり、善く此の土地を知りたる人の言葉なら

人、是より北に方りて黒岳あり、西北の方に江刺港あり、また國の東南の角に恵山あり、東に回りて川波砂原鷺木あり、膽振と大なる灣を抱く、總べて北海道の産物は、山に金銀石炭あり、海に鮭、鯨、昆布、帆立貝あり、其中魚類は、西の海に多く、海草類は東の海に多し。

後志

後志は郡十七ありて、南は渡島に觸れ、東は膽振に界し、東北は石狩に隣り、西より北は、総べて海に出づ、形二の凸の字を並べたるが如し、南にある方大きく、北にある方小し、國の南に大田岳、太櫓岳あり、是より山筋北に續き、高いも低いも山の

路北の止りに與市岳あり、また石狩に近き港を小樽といふ、西に回りて、小凸の頭を御神崎といひ、大なる凸の北の肩を弁慶崎といふ、其の間に後志川あり、

石狩

石狩は拳を出して親指を立てたるが如き形にて、南は後志、膽振、東は日高十勝北見に界し、北は指を天塩に入る、郡九ありて、野山多く、海少し、東南に夕張岳あり、其の北東に石狩岳あり、此の山の後を回り、種々に曲りて、西の海に入る、水を石狩川といふ、是は北海道にて尤長く且大なる川なり、川の南の方を札幌とす、開拓使の役所ありて、市中大に賑ふ、抑此の

國は國を石狩といふのみならず、郡に石狩あり、山に石狩あり、川に石狩あり、所に津石狩あり、なにしてかく石狩といふ言葉を好めりや疑はし、

天塩

天塩は六郡ありて、西は海に向ひ、東北は北見に界し、南は石狩の指を含みて、人の字の形をなす、東には山多く、海邊には野原多し、巽の方に天塩岳あり、是より出で、西に流る、水を天塩川といふ、流れの下は沿地多く、蘆葦も難波の浦と異らず、水の出口を深くせば、かならず好き川となりぬと、

北見

北海道といへば、日本の北の海道なること知るべし、北見といへば、其の内の北の國なることまた知るべし、北見の北は北の海、北見の南は天塩の北、石狩の北、十勝の北、北見の東は釧路根室の北、西なり、さて諸骨川、常呂川は北に流れて、北の海に入り、當拂網走の湖は北東にありて、北に落つ、また西北には宗谷港あり、北の方樺太に向ふ、地面横に長く、郡の數八あり、

膽振

膽振は郡八ありて、南は渡島、西は後志、北は石狩、東は日高に界し、南は海に臨みて、半に江巴岬出で、西の方渡島と大半月

の海を受く、地面南より北東に折れ曲る、江巴岬の内を室蘭といふ、好き港なり、川は西の方に長流別長万部などあり、東の方に幌別敷宇などあり、湖は東に支骨湖阿札湖あり、室蘭に近き所、蛇田浴あり、山は西北の後志山を高くとす、此の山後志と名くるゆゑ、中には餘所の名字を名乗る人の如くに思ふものもあるべけれど、山は昔より後志と呼ばひ、國は近頃名けたるものなれば、此の方却つて本家の如きものなるべし。

日高

日高は郡七ありて、東は十勝、北より西は石狩、膽振に隣り、西

南は海に向ふ、地面三角の形をなす、國の真中に横岳あり、巽に當拂岳あり、幌別浦河毘保久沙流などいふ川々多し、苗南沙流川の上に義経の社あり、抑義経は稚きとき父義朝軍に敗れ、母の懷にありて、雪の中を逃れしが、後兄頼朝と不知になりしときも、吉野山峰の白雪分けて入り、終に雪深き此の地に祠られしは、なにとてかく雪に縁あることぞや。

十勝

十勝は菱形の地にて、西は日高、北は石狩、東は北見、釧路に界し、東南は海に向ふ、郡七ありて、山多し、西に獵虎岳あり、北に十勝岳あり、是より出づる水を大津川といふ、流れの末は海

を指し二に裂け落ち鮭上る所なり是は東海岸の尤大なる川にて、石狩川の如く、川に添ふて住居する土人多し、

釧路

釧路は郡七ありて、西を十勝、北を北見、東を根室に當て、南を海にむけ、地面の形四角にて、良の角欠け、巽の角出づ、西北に雄阿寒、雌阿寒といふ山あり、是は阿寒の山の妻夫にて、其の間に阿寒の湖あり、また雄阿寒の東に、久摺湖、摩周湖あり、南の方には當路湖あり、其の邊の湖水落ち合ふて久摺川となり、南の海に落つ、其の東に厚消港あり、此の辺の良き港なり、

根室

根室は弓引、絞りたる形に似て、西の方釧路北見に背き、東の方海を受く、北海道にて、東端れの國なり、巽の角を納沙布といひ、國の中にある川を西別川、支別川といふ、其の間の野付岬は、東南の方へ長く、長き夜の遠の眠りや、根室の海波乗り、船の泊り居て、土地木のづから賑ふ郡の數五あり、

千島

千島は、根室の東北にある多くの島々にて、郡の數五あり、根室の方の細長き島を國後といふ、其の南にある丸島を志古潭といひ、其の東北にある細長き島を擇捉といふ、是は國後よりも三倍せる地なり、是より東北に猶小き島十八あり、

さて近頃まで日本人と魯西亜人と北海道の北なる樺太の地に交り住みしが、明治八年朝廷彼の國と約束の上樺太の地を彼に與へて、此の十八の小島と交易せられたり是を蟹と猿との交易に譬へていはい、いづれが捏り飯なるか、いづれが柿の核なるか後に至らねば知れがたき、

南の洋中にある島

小笠原島

小笠原島は一名無人島ともいひて、東海道の東南大洋の中にあり島の数大小打ち交せて九十餘りあり、其の中に大なる島二あり、北にあるを父島といひ、南にあるを母島といふ、

父島は豎長くして横其の半分に過ぎず内に鑑山旭山あり、母島は豎甚長く横甚狭く内に乳房山あり、此の二島の邊にある五六の島々も皆親族の名にありあれど、いづれ兄やら弟やら、いづれ姉やら妹やら、大方似よりの大さなる抑此の島々は昔豊臣秀吉のとき小笠原貞頼といふ人が初めて見出し、其苗字もて名けしものなりと云、島の中には椰子甘蔗多く、海の中には鮫巨鼈多し、

琉球

琉球は九州の南大洋の中にある島なり、國の形長より坤に長く、其の幅至つて狭く、國の中を三の府に分ちて、中山山南

山北といふ其の外洲の數五郡の數三十五あり西の方に半島ありて北に灣を抱く其の中を運天港とす西南の隅に那覇港あり其の上を首里といふ國王の居る所なり昔鎮西八郎為朝伊豆の大島に流されし其の邊の島々を打ち從へ猶も子張り月の入る方より船漕ぎ出此の國に來りて一子を生み其の子後に天孫氏に代りて王となり舜天王と稱したり是より後國王の家系はく代りかど今の王はまた舜天王の子孫なりといひ傳ふさて國の南の端れを喜屋武崎といひ北の端れを邊戸崎といふ南には八頭岳龜岳辨岳浦添山あり北には恩納岳佳楚岳ありいづれ

の所も時候熱く風強し人の風俗言葉遣ひは大方日本と同一ことなれどもたゞ此の國にては男までも髮結びて簪さす習なりさてまた此の國は島の數遠近三十餘ありて其の内尤大なるは九州の方に偏りたる大島なり其の間徳島永良部島ありまた國の西南に方りて宮古なんぞいふ島三四あり國産には塗り物上布芭蕉布などあり世間の人々が琉球にて作る泡盛りや刷りを薩摩の泡盛り薩摩の刷りといふもをかき名目なれども彼の薩摩芋のこそを薩摩にては琉球芋といひ琉球にては唐芋といふもまたをかきも唐に行きて問はばなにそいけん聞かまはし

獨學日本地理書卷の下終り

明治十年三月二十八日
板權免許

定價四十錢

編者 板主
發兌 書肆

東京下谷仲徒士町
四丁目三十二番地
中根淑

同馬喰町二丁目一番地
森屋治兵衛

